研究課題	つながりを大切にした自ら考える国際貢献への取組
副題	～生徒自らが交流プログラムを考え実践する主体的な学習活動の展開を通して～
キーワード	Web 会議システム　交流
学校名	**大分県立立津久見高等学校**
所在地	〒879-2421 大分県津久見市大字津久見 3485 番地 1
ホームページアドレス	http://kou.oita-ed.jp/tukumi/

１．研究の背景

本校は大分県東部の津久見市に位置し、一市一校の海と山の風光明媚な環境に恵まれた学校である。産業では鉱工業で石灰石の採掘が行われており、セメント工業が発達している。またみかんやマグロ漁など農林水産も盛んである。

平成２４年に後期再編整備計画により３校が統合して新大分県立津久見高等学校として設置され、前身の津久見高校から通算創立８０年目を迎え、卒業生も多方面で活躍している。

普通科、生産機械科、電気電子科、会計システム科、総合ビジネス科　の５学科を有し、普通科教育をはじめ、地域に根差した産業教育にも力を入れている。

産業教育では、これまで工業や商業のスペシャリストの育成をはじめ、地元津久見市の地域活性化を担う人材の育成を目標に取り組んできた。地域の特産品を活かした商品開発や地域の工業連合会との連携など、地域の活性化を図る上で、地元を知ることはもちろん、世界とのつながりを踏まえたグローバルな視野を持つことが課題であり、本校の生徒の育成に欠かせないものであると考える。

大分県教育委員会の事業でもある『地域の高校活性化支援事業』への取り組みをはじめ、津久見高校地域振興協議会の協力もあり、津久見市をはじめ企業等と学校の連携を深めることで、成果を上げてきている。

２．研究の目的

就職における新規高卒求人では、コミュニケーション力や社会人基礎力等を必要な資質として重要視する地元企業が多くみられる。

進学においては、「主体的・対話的で深い学び」として、問題発見学習、課題解決学習、体験学習、協働学習などを取り入れ、相互に刺激を与えながら知的に成長する機会を積極的に設けている。

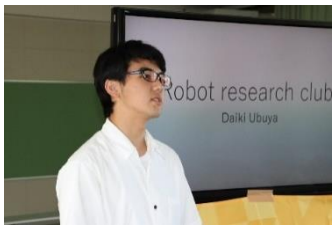
そのような現状を踏まえ、生徒自らが交流プログラムを計画立案し、交流による連携を深める主体的な学習活動を展開することで、世界に目を向け、言葉や文化、慣習の違いなどを受け入れ、世界とつながろうとする態度を育成していきたい。また交流により、学校を始め地域の情報発信が活発化することや、世界の国々から学ぶことにより、グローバルな視点で地域の活性化につながるヒントとなり、さらに次の学習へと取り組みの拡がりが期待される。

３．研究の経過

１年間の研究の経緯を一覧として記載する。Web 会議システムを活用した交流（対面での交流を含む）による生徒の変容に関する研究に取り組んできた。研究では、普通科・商業科(会計システム科・総合ビジネス科)

の生徒を中心に主体的な実践を行ってきた。

【表１　実践研究の流れ】

月	内容・方法等
4/20(金)	パナソニック教育財団実践研究助成に係る研究プロジェクトチーム結成及び会議(研究概要説明　台湾高校交流事業協議)　１１名出席
4/27(金)	パナソニック研究助成金贈呈式　スタートアップセミナー(東京)
5/10(木)	プロジェクト会議　台湾の高校来校に係る交流事業について協議
5/21(月)	(台湾)国立永靖工業職業学校の教育旅行(約４０名)を招いた異文化交流体験活動 【交流日程】 10:00　　台湾高校生到着 11:30～12:35　全体交流会(歓迎セレモニー) 13:20～14:10 グループ交流(内容は生徒が企画立案) 14:30～　　見送りセレモニー 15:00～　　見送り(正門にて)
6/8(金)	プロジェクト会議(7 月 Web 会議システム実施について)
7/10(火)	ベトナム・インドネシア(国際交流員　ＡＰＵ留学生)との Web 会議システムを活用した交流 ◆英語による１分間プレゼンテーションの実施(内容は生徒各自が設定)  ◆プレゼンテーションへの質問及び応答　交流員よりアドバイス
7/13(金)	プロジェクト会議(1 学期の取組における課題等について)
8/2(木)	パナソニック教育財団研究成果報告会について(中間報告会)
8/30(木)	プロジェクト会議(台湾教育研修旅行について)
9/19(水)	プロジェクト会議(台湾教育研修旅行について)
10/30(火)	ビジット・ジャパン台湾訪日教育旅行促進事業 日台教育旅行関係者交流会(東京都)◆学校交流の相手校とのマッチング　等
11/6(火)～9(金)	台湾教育研修旅行　治平高級中学(高校)を訪問し交流　※現地から本校へ Web 接続し、研修旅行へ参加できなかった生徒(４名)を含め交流を実施
12/4(火)	津久見市ロータリークラブ例会にて　これまでの研究成果の取り組みを発表

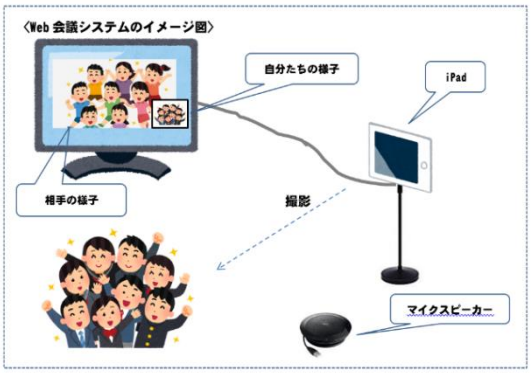
12/12(水)	プロジェクト会議(２学期の取組における課題等について)
1/7(月)	プロジェクト会議(市民会館での研究成果発表会について)
2/8(金)	研究成果発表会　(津久見市民会館大ホール)
3/15(金)	プロジェクト会議(１年間の成果　課題の明確化　次年度への向けた取組等)

４．代表的な実践

(１)Web 会議システムを活用した交流

本研究に取り組むにあたり先行研究として、県の機材等を借用し試験的に Web 会議システムを活用した中国、カンボジアの国際交流員との交流を行った。

そもそも Web 会議システムとは、インターネットを利用し、遠隔地をオンタイムでつなぎ映像や音声のやり取り・資料の共有等を行うことができるコミュニケーションの手段である。Web 会議システムでは複数同士の接続が可能になり、その活用の幅が広がってくる。Web 会議システムに必要な機材としては、ノートＰＣやタブレット、マイクスピーカー、映像出力用の大型スクリーンとしてプロジェクターや大画面モニターが必要になる。(図１)



【図１　Web 会議システムイメージ図】

少人数で高解像度での Web 接続を期待する場合、大画面モニターの方が鮮明でありより効果的である。初回の取り組みでは、県教育委員会の教育情化推進班が推奨する Apple 社の ipad をはじめ必要機材一式を借用した。

Web 会議システムを運用するアプリケーションとして、すでにインストールされている「WEB　EX」(ライセンス契約あり)を使用した。

Web 会議システム導入の利点として、一つ目は、『手軽に海外の人たちと接続ができること』、二つ目は、『語学力向上のための生きた英会話等の実践ができること』、三つ目は、『課題解決型学習として、生徒の思考力、判断力、表現力、プレゼンテーション力等が向上すること』などがあげられる。

【図２　試験的な接続の様子】

初回の交流では、交流内容を、自己紹介、津久見高校の紹介・台風１８号による地域や学校の被災した状況の説明・地域ボランティア活動をはじめ、国際交流員からの自国紹介及び語学に関するアドバイス等に設定した。

参加者は普通科２年生及び３年生の生徒６名、外国語科教員３名(ALT を含む)、県教育委員会指導主事、教育財務課情報化推進班コンシェルジュで約５０分間の学習活動を行った。(図２)

２回目の Web 交流では、４月２７日(金)に行われた助成金贈呈式でのスタートアップセミナーにてご助言いただいた『１人１分間プレゼンテーション』を取り入れ、テーマ設定など各自(参加生徒６名)が意欲的に取り組み資料作成にあたった。

交流相手はベトナム・インドネシアの国際交流員であり、対象生徒は普通科６名(２年生３名　３年生３名)で、約１時間の交流であった。

事前学習として、交流相手の国際交流員の国であるベトナム、インドネシアの調査、テーマに関する５枚のスライド作成、英語への翻訳など、また質問事項等を想定して、２人でペアになり模擬問答するなど、協働学習として積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が大いに見られるようになってきた。

１分間プレゼンテーションのテーマについては、地域の祭りや学科紹介、部活動、趣味など多岐に渡って設定され、各自が工夫を凝らしたプレゼンテーション資料の作成に取り組んだ。

【図３　治平高級中学訪問①】

また英語での表現にも工夫が見られた。英語での表現については ALT の協力もあり、伝わるプレゼンテーションとなるようゼスチャーを交えるなどより実践的なものとなった。

３回目の Web 交流では、実際に台湾の治平高級中学に訪問し現地から本校に Web 接続を試みた。（図３、図４）

台湾へは１年生２名、２年生１名、３年生１名、引率２名の計６名での訪問であり、当初から Web 交流に関わっていた生徒を中心に人選(希望)した。

【図４　治平高級中学訪問②】

治平高級中学(高校)への学校訪問については、事前学習から、訪問する生徒、残留する生徒を中心に交流プログラムの設定に取り組んだ。課題研究や商品開発に関することなど、今後の継続的な接続を考慮し交流プログラムを設定した。実際の交流では、本校で商品開発し現在も流通しているお菓子「あまなっつぱい」を持参し、台湾の高校生に試食してもらった。味の感想をはじめ、台湾での売れ行き予想、類似商品の情報など、台湾での流通が可能かを含めて意見をもらうことができた。また本校の課題研究の取り組みである津久見市で採掘される硅石の加工(商品化)に関しても、台湾で
の石の加工に関する状況を踏まえて意見をもらい、これからも協働で台湾と大分県の特産品を活かした商品開発に取り組むことができればと今後について話を膨らませることができた。

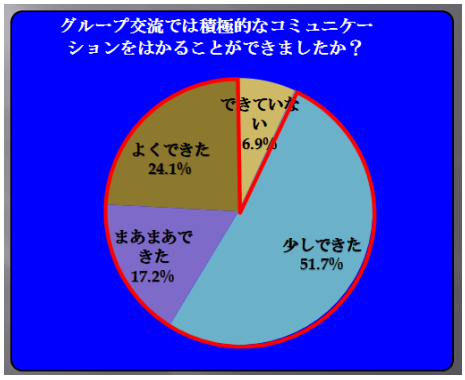
今回の台湾訪問に Web 交流するための機材一式を持参したが、治平高級中学にマイクスピーカー、プロジェクター、スクリーン等を用意してもらうことができた。事前の打ち合わせで、接続のアプリケーションについては基本(無料)の『ZOOM』を使用することとした。今後の継続的な接続を想定し無料のアプリケーションを試験的に活用したが、予想以上の使い勝手の良さに、今後の活用が期待される。

５．研究の成果

◆（台湾）国立永靖工業職業学校の教育旅行を招いた異文化交流体験活動

５月に来校した国立永靖工業職業学校については、Web での交流ではなく対面での交流として取り組んだ。交流プログラムについては生徒会を中心に、全体での歓迎セレモニーから学科ごとのグループ交流まで企画し運営した。事前学習から交流国である台湾の文化や風習、観光、特産品、流行しているものなど幅広く情報を収集し、質問項目などをまとめ交流が実りあるものになるよう準備した。また津久見市の文化や観光をはじめ、本校の学科での学びなど話しができる内容をまとめ交流に臨んだ。

会話についてはスマホの翻訳アプリ（「音声＆翻訳」　「話して翻訳」等）を活用した。しっかりとした翻訳にはならないケースが多々見られたが、趣旨が伝わり交流も主体的に比較的スムーズに進んだ。（図５）　スマートフォンやタブレットの翻訳アプリケーションでも少人数での交流であれば十分対応可能である。



【図５　生徒アンケートよ

対面での交流は Web での交流とは違い、同じ空間を共有することで、こちらの表情等の反応がダイレクトに伝わり、Web での交流より意思の疎通が容易に図れる。これは体験学習後の生徒のアンケートからも明確であり、スクリーンを通した交流では、会話のみがクローズアップされ、お互いの表情や場の雰囲気などが伝わりにくく、『Web 交流では意思の疎通が図りにくい』と回答した生徒が７割を超えている。ちなみに Web でも対面でも、『コミュニケーション力の必要性について』はどちらも９０％を超える高い割合を示している。

今回の対面での交流は、Web 交流の特性を再認識するものであり、今後の Web 交流の進め方や交流プログラムを設定する上でのヒントにつながった。

◆WEB 会議システムを活用した交流について

７月の Web 会議システムを活用した交流では、生徒各自がテーマを一つ決めて１分間プレゼンテーションを行った。地域の祭りや部活動・学科紹介・趣味など多岐に渡ってテーマ設定し取り組んだ。プレゼンテーションのスライドは３～５枚程度であったが、英語での表記にも工夫を凝らし、話し方もゼスチャーを取り入れるなど工夫が見られた。英語での表現については前述したが ALT の協力を得て、より分かりやすく伝わるプレゼンテーションとして指導していただくことでより実践的でポイントを押さえたものとなった。

１１月の台湾訪問時の Web 交流（治平高級中学との交流）では、実際の生徒同士の対面交流に加え、本校と Web 接続し WEB 交流も同時に行った。現地と１時間の時差ではあるが、実施にあたっては接続時間帯にそれほど問題はない。接続に要する機器については、事前に交流校に依頼していたこともありスムーズに接続ができた。

訪問した本校の生徒４名と治平高級中学の高校生８名、それに本校から Web 交流に参加した生徒４名の計１６名での交流となった。（図４）

生徒の変容として、Web 交流実施後のアンケートより「積極的にコミュニケーションを図ることができましたか？」の項目に当初は５０．１％の割合であったが、２回目以降の交流から同じ項目で７３．４％と大幅な割合の増加が見られた。要因として Web 交流の特性を踏まえた場の雰囲気や交流の在り方に慣れてきたことや、「積極的に交流を図りたい」という生徒自身の意識の高まりが考えられる。アンケートの記述の回答からも「もっと英語を話したい」や「実践的な学びなのでためになる」、「もっと英語を勉強しなくては・・」、「通常の授業よりも意欲的に取り組めた」など前向きな意見が多数見られた。また、交流にあたり事前学習において、参加する生徒たちで協議し交流プログラムを設定することで、自分たちで企画し取り組んでいるとい

う意識を持たせることができた。このことが交流に主体的に取り組むことにつながってきていると考えられる。
　今回の研究スタッフとして取り組まれてきた教員のアンケートより、「Web 交流は生徒の学びに役立つと思いますか？」、「生徒は Web 交流で異なる考え方に触れることができたと思いますか？」の項目で「そう思う」、「だいたいそう思う」と回答した割合がそれぞれ８割を超えており、グローバルコミュニケーション力の育成については課題が残るが、実践的・体験的な取り組みが生徒の主体的・対話的で深い学びにつながっていると考える。

６．今後の課題・展望

①交流について、先方からの質問に自信を持って応えられないので、ある程度質問を想定しておくことや、プログラム自体の構成を発言しやすいものにしてみるなど改善が課題である。
②Web 交流時の１人１分間プレゼンテーションについては、しっかりとプレゼンテーション資料を作っていても、いざプレゼンの段階で説得力のないプレゼンテーションになってしまっている。英語でのプレゼンテーションに自信を持てずきちんと発音できていないことや、プレゼンテーション自体はしっかり話せていても、質疑となると黙ってしまうなど、英語をはじめとする語学力のさらなる向上が大きな課題であり、地道に取り組みを推進していくことが肝要である。
③今後は、台湾の高校との継続的な交流（Web 交流　対面交流）を図り、課題研究や総合的な学習の時間など、教科間、科目関の連携を図り取り組みを充実させたい。また学習活動において生徒の変容をしっかりと把握するため効果的な評価の在り方など、学校全体で組織として工夫改善に努めたい。

７．おわりに

　本研究の機会をいただいたことにより、Web 交流などの学習活動が生徒に変容をもたらす可能性として大きな成果を上げる（生徒のグローバル意識の向上など）ことができた。研究助成をしていただいたパナソニック教育財団に深く感謝し、次年度以降、地域からグローバル意識向上推進校として成長できるようさらに研究を発展させたい。

８．参考文献

１)国際理解教育 Vol.24　(2018)　日本国際理解教育学会
２)奥村絵里(2018)　『世界一わかりやすい ZOOM マスター養成講座』つた書房